

現代日本における福田恆存の保守主義再考の高まりについて ——時間意識に着目して——

関西学院大学大学院 松野靖子

現代日本において「保守」という用語は政治界、一般といった様々な場面で人々に使用されるが、その意味内容が多様であることを指摘できる。元来、保守主義とは「進歩」的理念をもつ勢力に対峙する目的で存在するはずのものであり、冷戦構造が崩壊しかつての対立軸が消失した現在は、もはや保守主義自体が意味を喪失しており、したがって今や、「保守」に対して人々が抱く印象が複雑化しているという状況が引き起こされている。そして、それら現在の保守主義を巡る議論の複雑化は、学術の世界においても見られている。保守主義は社会学者のカール・マンハイムによる研究が有名であり、日本でも近年は宇野重樹などに参照されており、日本の保守主義についてもマンハイムの類型が参照されている。そこでは、保守主義の時間概念について未来への漸進的な発展性を志向する性質があるという分析が大いに参照されている。だが、そのマンハイムの保守主義の時間概念以外の類型についての可能性は日本では研究されておらず、漸進的な発展性を認めない思想については単に復古的であり、正当な分類の保守主義的な時間意識とは異なるとされてきた側面がある。しかし、西欧の直線的な時間意識とは異なる可能性がある日本では、思想を研究する際はマンハイムの時間概念の類型に留まらず、日本の時間概念の独自性に根ざした保守主義を捉える必要がある。従来の研究の問題は、保守主義の時間概念をマンハイムの定義のみに着目するがゆえに、日本では異なる時間概念を有する保守主義の類型の存在の可能性について取り上げられていないことにある。その解決法策として、戦後日本に保守論客として活躍した福田恆存の思想を取り上げ、保守主義の時間概念の枠組みを捉え直すことを試みた。

また、極めて近年、福田の思想が比較的若い世代に再評価されているといった現象がある。彼らによると、バブル崩壊後の現在、将来への期待感への信用を失っている状況下において、福田の生き方について説く思想が、大いに参考される価値のあるものと捉えられている。申請者は、従来の研究とは異なる保守主義の時間概念をもつとする福田の思想が、かつての戦後日本において「進歩」的理念をもつ近代主義への対峙を目的として形成された当時の状況と、現在福田の思想を再評価する人々が置かれている現代日本の状況との差異に着目し、両者は同様の保守主義の時間概念を意識していたが、各々の思想をもつに至る動機にも差異が存在すると想定する。そこで申請者は、まず福田が思想を形成した動機を知識社会学的に明らかにし、それと比較する形で現在の福田の思想を再考する人々の動機の形成過程についても知識社会学的に分析するという研究課題の着想に至った。申請者の企図する保守主義の知識社会学的研究は、保守主義の同様の時間概念を有した二つの時代における思想の形成動機を明らかにすることを通して、戦後／現代という二つの時代の思想状況の変遷を明らかにし、新たな現代社会の思想状況の解明を目論んでいる。